

## 巻頭言

# 若者が地方に移住することの意味

内田 樹 (凱風館館長・神戸女学院大学名誉教授)

「どうして若者は地方に移住するのか」という問いについて論じてみたい。

いきなりちゃぶ台返しをするようだが、統計的には「若者の地方移住」は起きていない。起きているのは逆のことである。2024 年の総務省のデータによると、首都圏への転入超過は 8 万人で、70%が若年層である。移動の理由は「大学進学」。地方出身者の 45%が首都圏の大学に進学している。そして就職。上場企業の求人はほぼ東京に集中している。三番目が文化的な格差。「地方には文化的なものが何もない」という不満が若者を都市へ押し出している。もう一つ、「都市は格付けが厳密」ということがある。どんな職業でも、都市に行けば、たちまち客観的な査定が下される。「村で一番の伊達男」「村一番の秀才」も都市に行けば冷厳な査定にさらされて、鼻っ柱を折られる。それでも若者たちは自分のランキングとニッチを知りたくて仕方がない。だから「エゴサーチ」を止めることができない。

だが、この趨勢に抗ってなお地方に移住しようとする若者がいる。多くはもう大学を卒業し、一度は何かの仕事に就いている。そして、都市における競争的環境に疲れて、より人間的な生活を求めて地方に移住している。

この場合、「文化的なものが何もない」という条件がむしろインセンティブになっている。ないなら自分で手作りしようと考えているからである。私が知る範囲でも、地方移住者は書店、カフェ、図書館、出版社、

映画館、ギャラリー、私塾など、それまでそこになかった文化的拠点を新しく創り出す人が多い。そして、そこが発する「文化的な香り」に惹きつけられてさらに若い人たちが集まってくるという「良循環」がしばしば起きている。

正確な統計をとったわけではないから確言はできないけれども、かなり多くの事例を見て来た経験から言えるのは、彼らはもう「競争」をしないということである。代わりに「共生」「協働」を選んだ。これは正しい選択だと私は思う。

地方移住を「競争からのドロップアウト」とみなす人はこれを「成熟への意志」に駆動された運動だということに気づいていない。「もっと大人になりたい」という強い思いが彼らを地方に導いている。言い換えると、「大人にならないと地方では暮らすことができない」という意味でもある。都市なら子どもでも生きていける。周りの人々と同じものを欲望し、同じふるまいをし、同じことを話していれば暮らしていける。でも、地方移住者には模倣すべき「周りの人」がいない。自分が占めるべき「ニッチ」もあらかじめ用意されてはいない。それは自分で手作りするしかない。自分には何ができるのか。ここでは何が求められているのか。それを真剣に思量しない者には地方移住はできない。

冒頭に掲げた問いの答えはここにある。地方移住をめざす若者たちが求めているのは「成熟」なのである。